

2008年北太平洋溯河性魚類委員会の調査計画調整会議と年次会議および科学調査統計小委員会の概要

関 じろう 二郎 (さけますセンター さけます研究部)

はじめに

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC) は、春にさけます類の調査船調査やシンポジウムなどの科学活動に関する協力を検討するための調査計画調整会議 (RPCM) が、秋に年次会議と合わせて科学調査統計小委員会、財政運営小委員会および取締小委員会が開催され、年によってはそれぞれの会議に併せてシンポジウムやワークショップが開催されます。2008年は春に韓国のソクチョ市で調査計画調整会議と「長期的リサーチモニタリングプロジェクト」に関する会合が、秋にはアメリカのシアトル市で年次会議と「ベーリング海—アリューシャン列島周辺における国際調査」に関するシンポジウムが開催されたのでその概要を報告します。

調査計画調整会議 (RPCM) と長期的リサーチモニタリングプロジェクト (LRMP) に関する会合

調査計画調整会議に先立ち2008年4月7～9日にかけて「長期的リサーチモニタリングプロジェクト (LRMP)」に関する第1回目の会合が開催され、各国から代表者2～3名、総勢31名が参加しました。会議はカナダのビーミシュ博士とリデル博士が共同議長となり進められました。冒頭、リデル博士から北太平洋のサケ資源管理のためには長期的な調査とモニタリングが重要であることについての報告がありました。引き続き各国の科学者が実施中の研究を紹介しながら、気候変動と資源変動の関わり、長期的な調査とモニタリングの重要性、調査が必要な海域や項目などについての見解を発表しました。2、3日目は初日の発表に関する議論を行い、さらにこれから行うべき重要な国際研究プロジェクトについて論議しました。また、カナダのビーミシュ博士から2008年を「サケ国際年」とすることが提案されました。最後に今回の会合の内容については共同議長の二人が取り纏めることと、秋に第2回目の会合をカナダのバンクーバーで開催することが合意されました (図1)。

調査計画調整会議は4月10～11日にかけて開催され、日本、アメリカ、カナダ、ロシア、韓国の5カ国から総勢36名の研究者が参加しました。2008年から日本が科学調査統計小委員会の議長国となったため、東北水研の石田所長が久しぶりにNPAFCにCSRS議長として復帰しました。会議では各国の調査計画と調査船についての航海調

査計画を説明しました。日本は北光丸、若竹丸、おしよ丸の3隻の調査船の計画について説明しました。その他にカナダ、ロシア、アメリカから合わせて6隻の航海計画について説明がありました。また標本とデータ交換の話し合いが行われました。

科学小委員会 (SSC) では4月7～9日に行われたLRMPの会議の内容について報告がありました。資源分科会では、標識、系群識別、BASISの各分科会でそれぞれの課題についての話し合いが行われ、特に大きな問題もなく終了し、最後に、2009年の会議をロシアのユージノサハリンスクで開催することで合意しました。

会議終了後にソクチョ市内の市場街を見学しました。売られている魚はホウボウ、タチウオなど暖水系の魚やサバ、タコ、カレイ類などなじみの魚が多くみられました。さけます類ではサケやカラフトマス、大西洋ザケは見られませんでした。サクラマスの干物と鮮魚が一尾5,000ウォン (500円) 程度で売られていました (図2)。



図1. 第一回「長期的リサーチモニタリングプロジェクト (LRMP)」への日本参加者。



図2. ソクチョ市内の市場で売られていたサクラマス鮮魚。1尾500円位。

年次会議および科学調査統計小委員会

2008年11月17～21日の4日間の日程でアメリカのシアトル市においてNPAFCの年次会議と科学調査統計小委員会、財政運営小委員会および取締小委員会が開催されました。日本は今村代表以下8名と杉崎領事が参加しました。日本は当初10名が参加の予定でしたが、日本国内での航空便の欠航というハプニングのため北水研の東屋さんと福若さんの2名が参加できず8名の参加となりました。

NPAFCの年次会議では、議長にコー博士に代わりキム博士が選出されました。午後から三つの小委員会に分かれ議題について討議を行ないました。最終日に本会議に対しそれぞれの小委員会から討議結果について報告があり、その内容について了承されました。また、次回の年次会議を新潟市で、調査計画調整会議をユーージノサハリンスクで開催することが正式に承認されました(図3)。

科学調査統計小委員会には日本、アメリカ、カナダ、ロシア、韓国の5カ国とオブザーバーを併せて40名以上が参加しました。日本からは調査船調査による北太平洋のさけます類の資源動向(Doc. 1118)と、北太平洋に分布するさけます類の脂質含量に関する報告(Doc. 1113)の2編の論文を紹介しました。各国の商業漁獲量の結果から、2007年にはさけます類の漁獲量が史上初めて100万トンを超え、引き続き北太平洋のさけます資源が高い水準にあることが報告されました。また、太平洋のさけます類の生活史の中で重要な冬季間の情報を収集する必要があることが指摘されました。

BASIS シンポジウム

年次会議に引き続き、11月23～25日の3日間の日程でシアトルのシェラトンホテルにおいて「ベーリング海-アリューシャン列島周辺における国際調査」に関するシンポジウムが開催されました。シンポジウムでは口頭、ポスター合わせて64編の発表があり、日本からは口頭6編およびポスター7編の合わせて13編の発表がありました。東屋さんと福若さんが参加できなかったため、発表者の変更があったものの北水研の永澤室長が対処して予定していた課題を順調にこなしていたのが印象的でした。シンポジウムは最初に気候変動、ベーリング海の生態系およびさけます類の



図3. NPAFC本会議風景 (写真提供:NPAFC).



図4. BASISシンポジウムで講演する加賀研究員。

再生産を概観した報告があり、その後、サケの移動と分布、餌料生物生産とサケの成長、食性と栄養の相互作用、さけます類の生産傾向と環境収容力の4セッションで、セッション毎に基調報告に引き続き参加者が報告を行いました。内容はベーリング海周辺海域の気候、海洋の特徴や生態系についてなど多彩なもので、この海域がさけます類にとって重要な生息域であることが再認識されました(図4)。

NPAFCに提出した論文は2007年分まで公表されており2008年についてもまもなく公開される予定です(<http://www.npafc.org>)。また、BASISシンポジウムで発表された成果については、NPAFCのBulletin No.5として2009年に出版される予定となっています。